

## はじめに

.....

補綴処置、修復処置はう蝕あるいは歯周疾患などの疾病により失われた組織を補い修復することが基本である。体内でもっとも硬い組織で血管構造をもたないエナメル質を修復していかなければならず、まだ再生療法といった自然治癒力を借りて治療のできない分野であることは周知のとおりである。また歯の一部が失われたからといって歯を抜いて新たな歯を入れていくというよりは、少しでも残された組織を利用しつつ、生体との親和性と強度という面を両立させ機能を回復させなければならないのが現在の歯科医療、修復治療の根本的な考えである。

今日では美容的な意味合いから組織の欠損がなくても修復処置がなされ、またこの賛否には筆者も触れたくはないが、この事例が示すとおり、歯は美容的な要因と認められている。時代背景を考えると修復処置に求められるものが枚挙できよう。つまり修復治療もただ欠損を補うのではなく、その質 (quality) として「美しくしなければならない」ということである。そして生体親和性を考慮すると「長期的に安定しなければならない」ことと、そのための必要条件として「強度的要件が具備されている」ことが挙げられる。この3つの条件を満たすことは容易ではないが、受診者はこのようなことを望んでいると考えたい。

さて具体的に何ができるかを筆者自身に自問すると、美しくするためには天然歯を模倣することであり、長期的安定のために適合のよい補綴物を選択し、歯周組織の正しい代謝を理解することであり、また強度的なことは歴史に裏付けられた材料を選択すること、という答えである。

本書は how to 本でありながらもこの自問自答に対しての提示を行っているつもりである。もちろんそんなに大袈裟な本ではないが、自然科学は哲学とは異なり考えを啓発するものでもなく、したがって読者には真理を追究するためにニュートラルな気持ちで本書を熟読していただくことが筆者からのお願いである。

平成 20 年 9 月

行田克則